



春の野



川崎ゆきお

「暖かくなってくると野に出たくなりますなあ」

「野っ原ですか」

「原っぱでも、何でもいい。草や木が生えているような場所。川でもいいが」

「この周辺は住宅地なので、そんな場所ありませんねえ」

「しかし、少し先だが川があるだろ。さすがにあそこは自然が残っておる。川原には草が生えておるしな」

「いつの時代の話ですか」

「え」

「確かに生えていますが芝生ですよ」

「あ、そう。公園になったの」

「そうです」

「あの川原の草むら、ジャングルみたになっていてねえ、水鳥の巣があったんだ」

「随分と昔ですねえ」

「河童もいたとか」

「それはないでしょ」

「怪しいものが出そうな寂しい場所だったんだよ。道なんてないしね。川原だから。そんなところに踏み込むのはアベックぐらいだ」

「人目を忍べますからねえ」

「変なものも落ちていたねえ。特に春先は」

「稚魚が泳ぎ出す頃でしょ」

「ああ、魚はねえ、本流じゃなく、脇の水路に沢山いたよ」

「水路？」

「田圃に水を引くためのね」

「ああなるほど」

「春になるとよく行ったよ。あの川原」

「今はすっかり公園やグラウンドになってますよ」

「長く行ってなかったからねえ。あっち方面に行く機会がなかったんだ。それに土手に上がらないと川原は見えんしね」

「川原って、河川敷のことですね」

「そうそう。あの川原がそんな状態なら、もっと奥まで出ないと、野に出るような感じにならんねえ。昔はこのへんは田圃だったから、殆どが野だ」

「野良仕事の野ですか」

「まあ、外でやる仕事のことだよ。田圃に限ったことじゃないけど」

「でも山なら、山仕事でしょ」

「そうだな。山は野じゃないがなあ。野って、平らに広がっていないと」

「草原地帯のように」

「まあ、このあたりじゃそれはない。牧場があったけどね。あそこが一番広い野だったなあ」

「そうなんですか」

「今は小学校になってる」

「それで笹原小学校というのですね」

「笹原ねえ。笹の原っぱだったんだろうねえ。昔は」

「それは聞いたことがあります。その頃の笹が、この近くの神社の境内にまだ残っているとか」

「詳しいねえ。私も知らなかったよ」

「そうですか。市のホームページに載ってますよ」

「じゃ、池があったんだ。この近くだ。知らないだろ」

「池ですか」

「ため池だが埋められた」

「今は？」

「子供センターのような施設になってる。しかし年寄りがそのグラウンドでゲートボールをやっているがね。まあ、地の人なら、池の中でやっているとは錯覚するかもしれないがね。当時の土手の木が残っている。それで、場所が分かたりする」

「風景にも歴史があるんですね」

「まあ、思い出してもせんないことだし、今は関係のない話だけどね。もう池も田圃も二度と戻らんものだから、その前を通っても懐かしいとも思わんよ。戻せる話ならいいけど、戻せない話は聞きたくもないし、見たくもない」

「そんなものですか」

「少し遠いが、もう一つ向こう側にも学校があるだろ。私はそこの出身だ。木造校舎時代だ。その前をたまに通るがね。何の感慨もない。もう別の物だ。別の小学校なんだからね」

「はい」

「大きな倉のような便所があってねえ。天井が高いんだ。二階ほどの高さだ。だから、上を見るのが怖かった。ここは倉庫と兼用なんだ。物置だね。仕切りがあって、その向こうは倉庫だ。そこに人の背ほどの巨大な玉があってねえ。もう腐りかかっていた」

「何ですか、それは」

「運動会の際の玉転がしの玉だよ。竹で編んで、紙を貼り付けてある。赤や白の玉があったんだが、破れていた。それが提灯お化けのように怖くてねえ。仕切りの上から覗いているようでね」

「あ、はい」

「今日は昔話をしすぎた。ちょっと野に出たくなっただけなんだ」

「田圃も河川敷も池もなくなりましたからねえ」

「そうだね。あるのは空だけか」

「空しいと言うことですね」

「ああ」

了